

27

音高

今回は音高、音の高さについてお話しします。

■音の高さと音名ードレミ

これまで何気なく「ドレミ」とか「ハニホ」という言葉を使って音を示してきました。それを音名といい、いろいろな表し方がありますが、もっとも世界的に普及しているのは、昔はラテン語、現在のイタリア語である「ドレミ」でしょう。実はドレミというのは、「聖ヨハネ賛歌」というグレゴリオ聖歌が元になっています。

ラテン語の歌詞

Ut queant laxis

Resonare fibris

Mira gestorum

Famuli tuorum

Solve polluti

Labii reatum

Sancte Johannes

〈大意〉

あなたの僕（しもべ）が

声をあげて

あなたの行ないの奇跡を

響かせることができるように

私たちのけがれた唇から

罪を拭い去ってください

聖ヨハネ様。

つまりメロディーの歌い出しが「Ut - Re - Mi - Fa」という風に一つずつ上がっているわけです。ここに目をつけた、僧侶で音楽家であったイタリアのガイド・ダレッツォ（991/2～1050）という人が、修道院の中で音楽を教えるためにこれを用いました。そのうち、言いにくい「Ut」という言葉が似た「Do」という言葉に変わり、また聖歌にはなかったラの次の音を「Si」という言葉に設定しました。そして「ドレミファソラシ」の7つの音名が決まったわけです。この「Si」は二つの説があります。イタリア語で「はい」という意味の「Si」という説、もう一つはこの「Sancte Johannes」の「S」と、それから「Johanne」のことを「Iohanne」とも言いますのでその冒頭の「I」という字を足して「Si」＝シと言ったのだという説があります。私はどちらかというところ「はい」という言葉の方ではないかと思っています。

■音名ーアルファベットとイロハ

このイタリア起源のドレミが歌から始まったために現在でも歌うときに用いられているのに対し、器楽で音の高さを示す時や理論の上では違った言い方を用いることが多いようです。それはアルファベットのA B Cを用いた言い方で、

ドイツを中心に広まっています。もともと音名をアルファベットで表そうとしたのは、中世のフクバルトやオド・ド・クリュニー（878 ごろ～942）といった人々でした。しかし現在の呼び方では、ドは A B C の A ではなく C に当たってしまいます。A はラの音に当たるのです。これは弦楽器の発達と関係があるようです。

弦楽器では例えばヴァイオリンは、開放弦の 3 番目にラの音があります。ヴィオラとチェロはいちばん高い音にラがあり、コントラバスは下から 2 番目の弦がラです。このように弦楽器にはどれも開放弦にラの音があり、そのためにオーケストラのチューニングなどでは必ずラの音から合わせるわけです。その音にアルファベットの最初の文字を当てはめたのです。

これでドイツ語の音名の元が決まりました。「C（ツェー）－D（デー）－E（エー）－F（エフ）－G（ゲー）－A（アー）－H（ハー）」です。そして普通だと B の字のはずのシの音は「Hハー」と言われるわけです。これはおそらく昔は B だったのでしょう。しかし小文字の b という字と h という字はとても似ています。ですから混同されてしまったということ、また b の方が丸くて柔らかい感じの字体なので、シの音が半音下がって柔らかくなった音のときに b という字を使ったのだということになっています。

イギリスでは私たちが普通に読んでいる英語のアルファベットを用います。つまり「C－D－E－F－G－A－B」になります。ここではシは B で、H ではありません。すなおです！ポピュラー音楽はアメリカやイギリスで発達したので、ポピュラーの世界で音名を言うときとクラシックのときとは違うので注意が必要です。

では私たち日本の音名というものはあるのでしょうか。もちろんあります。それはイロハです。西洋音楽の導入は明治時代にアメリカから行なわれたので、A B C を、当時アイウエオよりもよく使われていたイロハに代入したわけです。ですから始まりのイは A＝ラです。つまり日本の音名はもともとはドイツ式から出ているということになります。

■臨時記号

これまではピアノの鍵盤の白い音、つまりシャープ#やフラットbのついていない幹音（かんおん）と呼ばれる元の音の名前について話をしてきました。しかしシャープやフラットなどの臨時記号（変化記号）がつけられた音にも、規則的に変化させた音名があります。

イタリアではシャープは「ディエジス diesis」と呼びます。フラットは「ベモレ bemolle」と呼びます。これを元の音名の後につければいいのです。つまり「ド・ディエジス」とか「ミ・ベモレ」とかいうわけです。しかし歌うときはこれは無理なので省略します。ドイツは機能的です。シャープがつくと「+is」となります。つまり「Cis ツイス」「Dis ディス」「Eis エイス」「Fis フィス」「Gis ギス」「Ais アイス」「His ヒス」となるわけです。フラットがつくと今度は「+es」となります。「Ces ツェス」「Des デス」「Es エス」「Fes フェス」「Ges ゲス」「As アス」「B ベー」となります。ミの場合は「Ees エエス」とはならないで「Es」、

ラの場合は「Aes アエス」とはならないで「As」となります。これは口調の問題でしょう。もとより歌うための言葉ではありませんから、これで歌を歌うことはありません。

日本では、シャープは「嬰」という言葉を前につけます。つまり嬰ハ、嬰ニ、嬰ホ、嬰ヘなどというわけです。フラットがついた場合は、「変」という字を前につけます。変ハ、変ニ、変ホ、変ヘというわけです。これもまたドイツ語と同じく歌のためのものではないので、歌う時はこんなことは言いません。

実は理論上は、シャープが二ついたりフラットが二ついたりして半音2個分上下することもあるのです。あまり出てこないのもそれほど覚える必要もないのですが、イタリアでは「ドッピオ doppio」という言葉をつけます。つまりシャープ二つ分のダブルシャープは「ドッピオ・ディエジス」、フラット二つ分のダブル・フラットは「ドッピオ・ベモレ」という言葉を後につければいいのです。ドイツではやはり同じ規則によって、ダブルシャープは「+ isis」、ダブルフラットは「+ eses」となります。このときシのダブルフラットは「Bes ベス」ではなく、Bを二つ書いて「ドッペルベー」と呼びます。日本では重嬰、重変という言葉の前につければいいのです。

■固定ド唱法と移動ド唱法

音名とは別に音階の始まりの音をドと読ませる習慣が、主に教育の世界に行なわれてきました。これは特に、簡単な曲が多くて伴奏に頼らないで歌う習慣のあるアメリカで広く行なわれてきたので、日本の教育の世界もそれに倣ったわけです。この方法ですと何の音でもドと歌うことになります。そこから同じ音程関係でたどっていけば何の曲でも歌えてしまうという便利なものです。

しかし、音高が定まっている器楽と一緒に演奏する場合、器楽はそれに対応することはできません。また曲の途中で中心となる音が変わってしまうといちいち読み換えをしなければならず非常にめんどろです。器楽の曲はとても長いものが多く、こうした転調がひんぱんに行なわれるということになって、このように階名で歌うのは事実上とても難しくなります。ですから、どんな音でもドと読む習慣はやめた方がいいのではないかなと思っているのですが、先ほど言ったような利点があるものですから、まだこれが残っているのです。

こうした、ドの音をどこの音にも変えて歌うことのできる歌い方を「移動ド唱法」といいます。これは主に声楽の世界で行なわれます。それに対して器楽の世界では「固定ド唱法」、つまり鍵盤のドの音がドの音なのだ、と言い張る唱法が用いられます。しかしもともと階名というのは、「1、2、3、4、5、6、7」などというように呼ぶべきであって、もともと音名であったドレミを階名に使うこと自体、大きな混乱を招くことでしょう。

■記譜

では音名によって決定された音高をどうやって楽譜に記すのかというお話をします。CとかAという字だけでは無理です。Cという音は鍵盤にたくさんあり、どこのCか分かりません。それを記すためには五線を用いなければなりま

せん。五線は最初是一本の線の上下に音符を記すことから始まり、グレゴリオ聖歌では4本で、歴史上は10本以上ということもありましたが、結局5本が定着しました。

しかし五線だけでは何の音かを決めることはできません。そこで音部記号が発明されました。最初はピアノの真ん中のドの音を示す「ハ音記号」が生まれました。現在では、五線の第三線がドとなるアルト記号、第四線がドとなるテノール記号が残っているにすぎませんが、かつては、いちばん上を除くすべての五線につけることができました。現在はアルト記号はヴィオラ、テノール記号はチェロ、トロンボーン、ファゴットという低い音を出す楽器が高い音を出すときに使います。

次に今度は、男の人の低い声を示すヘ音記号が生まれました。これは、つけられた線がファの音になります。ヘ音記号は低音楽器—ファゴット、バス・トロンボーン、チューバ、チェロ、コントラバス、ティンパニなどに用います。

そして最後に現れたのが、現在私たちにいちばん親しいト音記号です。主として高音域を用いるヴァイオリンのために使われたので、「ヴァイオリン記号」という名前もあります。普通は下から二番目の線につけるのですが、ここがソになります。このハ音記号、ヘ音記号、ト音記号という音部記号は、一段の五線の最初に記されて、メロディーを受け持つ楽器のために用いられるのですが、ピアノやハープなどのように広い音域にわたった音や和音を書くためには、五線が一段ではとてもむりです。そこで二段の五線を使い、上にト音記号、下にヘ音記号を書いて、中カッコでくくります。これを「大譜表」といいます。これは一人が演奏するときを使う記号です。

この大譜表と混同されるのにスコア＝総譜がありますが、これは違った種類の楽器が同時に演奏するアンサンブルのための楽譜です。段数をもっと多いのが普通ですが、仮に二段でも中カッコではなく大カッコでくくります。大カッコでくくられた楽器同士は、弦楽器とか木管楽器といったように、同じ種類の楽器です。違う種類は縦の線が続けるのみで大カッコはつけません。これによって楽器のグループが一目瞭然です。例えば合唱のスコアでは、ソプラノ、アルト、テノール、バスが大カッコでくくられています。これは人間の声という意味で同じだからです。

こうした音の高さと音の長さを示す音符が書かれて初めて、楽譜のおおもとができあがります。そこに強弱やニュアンス、速度なども記されなければなりません。これらは気分によって変わるものなのでかなり曖昧です。ですから、最低、高さと言はしっかり表せなければならないのです。